

初期仏典にみられる六人の自由思想家の所説について (2)

仲宗根 充修

前稿に引き続き、諸部派に伝承される「沙門果經」類および同内容の所説、さらにこれを引用する説一切有部所属の文献を比較することによって、説一切有部に伝承される六人の自由思想家の所説、本稿ではマスカリン・ゴーシャーリプトラ（マッカリ・ゴーサーラ）の所説について考察する。

キーワード：初期仏典、沙門果經、説一切有部、六師外道、マスカリン・ゴーシャーリプトラ

1. はじめに

マスカリン・ゴーシャーリプトラの教えであるアーjeeヴィカ教については、仏教文献、ジャイナ教文献、タミル語文献に伝承され、先行研究も多数存在する。アーjeeヴィカ教は「生きとし生けるものが、雑染するの、清浄となるの、無因無縁である」などの無因無縁論や「愚者であれ、賢者であれ、定められた期間、輪廻を繰り返し、最終的に苦滅に至る。それはあたかも、糸球が投げられたとき、〔糸を〕解きながら転がるようである」などの決定論（宿命論）¹⁾を説いたと伝えられる。

初期仏典の最古層に位置づけられる Suttanipāṭa (Sn), Aṭṭhakavagga には、「苦行あるいは厭離にもとづき、あるいはまた、かつて見たこと、聞いたこと、思考したことにもとづいて、未来の種々なる生存に対する愛執を離れていない（アーjeeヴィカ教徒らは、）輪廻による（自動的な）浄化を主張する²⁾」という輪廻浄化説がみられる³⁾。

また、古層に位置づけられる Saṃyutta-Nikāya (SN), Sagāthavagga には、「かれは苦行と厭離により、自己をよく防御し、語を捨て、人びととの論争をやめて、平静で、妄語から離れ、真実を語る人である。かれは実に決して⁴⁾悪をなす

ことがない⁵⁾」というマッカリ・ゴーサーラにたいする称讃がみられる一方で、新層に位置づけられる Aṅguttara-Nikāya (AN) には、「わたしは、天界・人間界において、このように多くの人の不利益のために、多くの人の不幸のために、多くの人の損害のために、不利益のために、苦のために行動する人を他にひとりもみない。すなわち、マッカリ・ゴーサーラである⁶⁾」や、「このようにいかなる多くの沙門の説の中でもマッカリの説は最も劣っていると説かれる。愚鈍であるマッカリは次のように説く者で、次のような見解を有する。業はない、行為（による作用）はない、精進はないと⁷⁾」という非難もみられる。

パーリ註釈書によれば、マッカリ・ゴーサーラは奴隸階級の出身であったが出家し、また一切智者であることを公言したとされる⁸⁾。

諸部派の文献を比較してみると、かれの教説内容には異同がみられる⁹⁾。本稿では諸部派に伝承される「沙門果經」および同内容の所説、さらにはこれを引用する説一切有部所属の文献を比較し、説一切有部に伝承されるマスカリン・ゴーシャーリプトラの所説について考察する。該当文献およびその所属部派については以下の通りである。

表1 「沙門果經」類および同内容の所説、ならびにその所属部派

「沙門果經」類および同内容の所説	所属部派
(1) Dīgha-Nikāya (DN) 2 Sāmaññaphalasutta (SPS)	上座部大寺派
(2) Majjhima-Nikāya (MN) 60 Apanṇakasutta	上座部大寺派
(3) Majjhima-Nikāya (MN) 76 Sandakasutta	上座部大寺派
(4) Saṃyutta-Nikāya (SN) XXII 60 Mahāli	上座部大寺派
(5) Saṃyutta-Nikāya (SN) XX IV 7 Hetu	上座部大寺派
(6) Saṃyutta-Nikāya (SN) XLVI 56 Abhaya	上座部大寺派
(7) 『長阿含經』 (T. no. 1)	法藏部
(8) 『寂志果經』 (T. no. 22)	所属部派不明
(9) 『雜阿含經』 (T. no. 99)	說一切有部
(10) 『增壹阿含經』 (T. no. 125)	所属部派不明
律に引用される「沙門果經」	所属部派
(11) Saṅghabhedavastu (SBV)	說一切有部
(12) 『根本說一切有部毘奈耶出家事』 (T. no. 1444)	說一切有部
(13) 『根本說一切有部毘奈耶』 (T. no. 1442)	說一切有部
論に引用される「沙門果經」	所属部派
(14) 『阿毘曇八犍度論』 (T. no. 1543)	說一切有部
(15) 『發智論』 (T. no. 1544)	說一切有部
(16) 『阿毘達磨大毘婆沙論』 (T. no. 1545)	說一切有部
註釈書に引用される「沙門果經」	所属部派
(17) Vinayavastuṭīkā (VVT) (‘Dul ba gzhi rgya cher ’grel pa)	說一切有部

2. 「沙門果經」類および同内容の所説

「沙門果經」類および同内容の所説 (1)～(10) を以下にあげる。

- (1) SPS (説者: Makkhali Gosāla) DN I, p. 53²⁵⁻³³:
 (2) MN 60 Apanṇakasutta (説者: 不明) MN I, p. 407²¹⁻²⁸:
 (3) MN 76 Sandakasutta (説者: 不明) MN I, pp. 516³³⁻⁵¹⁷:
 (4) SN XXII 60 Mahāli (説者: Pūraṇa Kassapa) SN III, p. 69³⁻⁶: 下線部 (A)～(D) に相当。
 (5) SN XX IV 7 Hetu (説者: 不明) SN III, p. 210³⁻¹⁰:

(A) N’ atthi ... hetu n’ atthi paccayo sattānaṃ saṃkilesāya, (B) ahetu-apaccayā sattā saṃkilesanti, (C) N’ atthi hetu, n’ atthi paccayo sattānaṃ visuddhiyā, (D) ahetu-apaccayā sattā visujjhanti.

(P) N’ atthi attakāre (Q) n’ atthi para-kāre, (M) n’ atthi purisa-kāre, (I) n’ atthi balaṃ (J) n’ atthi viriyaṃ, (L) n’ atthi purisa-thāmo (N) n’ atthi purisa-parakkamo, (S) Sabbe sattā sabbe pāṇā sabbe bhūtā sabbe jīvā (T) avasā abalā aviriya (U) niyati-saṅgati-bhāva-pariṇatā (V) chass’ evābhijātisu sukha-dukkhaṃ paṭisaṃvedenti.¹⁰⁾

- (A) 諸の衆生の雑染には因はなく、縁はない。
 (B) 無因・無縁から、諸の衆生は雑汚する。
 (C) 諸の衆生の清浄には因はなく、縁はない。
 (D) 無因・無縁から、諸の衆生は清浄となる。
 (P) 自らによる行為はない。(Q) 他者による行為はない。(M) 人による行為はない。(I) 力はない。(J) 精進はない。(L) 人の勢力はない。(N) 人の努力はない。(S) 一切の衆生、

一切の呼吸する者、一切の存在する者、一切の生命ある者は、(T) 自在力なく、力なく、精進なく、(U) 定めと機会と生来の性質によって変化し、(V) 六の生まれにおいてのみ、楽苦を感受(経験)する。

(6) SN XLVI 56 Abhaya (SN V, p. 126²⁶⁻³⁰) (説者: Pūraṇa Kassapa):

(E) Natthi hetu natthi paccayo aññāyā adas-sanāya (F) ahetu apaccayo aññānam adassanam hoti. (G) Natthi hetu natthi paccayo ñānāya dassanāya (H) ahetu apaccayo ñānam dassanam hoti. ¹¹⁾

(E) 無知と無見には因はなく、縁はない。(F) 無因・無縁にして、無知と無見がある。(G) 知と見には因はなく、縁はない。(H) 無因・無縁にして、知と見がある。

(7) 『長阿含經』『沙門果經』 T. no. 1 (27), 108c9-13 (説者: 波浮陀伽旃延):

(I) 無力 (J) 無精進 (L) 無力 (M) 無方便。(A) (B) 無因無縁衆生染著。(C) (D) 無因無縁衆生清淨。(S) 一切衆生有命之類。(T) 皆悉無力不得自在無有冤讐 ¹²⁾。(U) 定在數 ¹³⁾中。(V) 於此六生中受諸苦樂。

(8) 『寂志果經』 T. no. 22, 271c8-10 (説者: 莫軻離瞿耶婁):

(C) (D) 人無因縁得淨人。(E) (F) 爲有罪福不爲無知無見。…無今世後世。(I) 無力不力。(J) 無精進。(V) 一切人得其苦樂。

(9) 『雜阿含經』

①卷第三: T. no. 99 (81), 20c14-15 (説者: 富蘭那迦葉):

(A) (B) 無因無縁衆生有垢。(C) (D) 無因無

縁衆生清淨。

②卷第七: T. no. 99 (155), 44a4-8 (説者: 不明):

(I) 無力 (J) 無精進。(K) 無力精進。(M) 無士夫方便。(N) 無士夫精勤。(O) 無士夫方便精勤。(P) 無自作。(Q) 無他作。(R) 無自作。(S) 一切人。一切衆生。一切神。(T) 無方便無力無勢無精進無堪能 (U) 定分相續轉變。(V) 受苦樂六趣。

③卷第七: T. no. 99 (157), 44a25 (説者: 不明):

(A) 衆生煩惱無因無縁。

④卷第七: T. no. 99 (158), 44b2 (説者: 不明):

(C) 衆生清淨無因無縁。

⑤卷第七: T. no. 99 (159), 44b8 (説者: 不明):

(E) 衆生無知無見無因無縁。

⑥卷第二十六: T. no. 99 (711), 190b26-27 (説者: 不明):

(A) 無因無縁衆生煩惱。(C) 無因無縁衆生清淨。

⑦卷第二十七: T. no. 99 (712), 191a14-15 (説者: 不明):

(E) 無因無縁衆生無智無見。(G) 無因無縁衆生智見。

(10) 『增壹阿含經』

①卷三十九: T. no. 125, 763c1-2 (説者: 尼捷子):

(A) 無因無縁衆生結縛。(B) 亦無有因亦無有縁。衆生著結縛。(C) 無因無縁衆生清淨。

(1)、(8) はマッカリ・ゴーサーラの説 (の一部)、(4)、(6)、(9) ①はプーラナ・カッサパ (プーラナ・カーシャパ) の説、(7) はバクダ・カッチャーヤナ (カクダ・カーティヤーヤナ) の説、(10) はニガンダ・ナータプッタ (ニルグラント・ジュニャーティブトラ) の説とされ、所説内容が同じであっても、同部派・異部派にかわらず、説者についての伝承が異なる ¹⁴⁾。

(1) SPS には (6) (E) (F) (G) (H) の文がみられない。これらの文は (9) ⑤ (E)、⑦ (E) (G) に対応する。また、(9) ②には (K)、(O)、(R) の文がみられる。

ちなみに、SPS にみられる「自らによる行為はない。他者による行為はない。人による行為はない。力はない。精進はない。人の勢力はない。人の努力はない」というマッカリ・ゴースーラの所説は、ジャイナ教文献 Uvāsaga Dasāo にみられる「奮起はなく、業はなく、力はなく、精進はなく、人の所作の努力はない。一切の存在は定められている¹⁵⁾」というゴースーラ・マンカリプッタの所説と一致する。このような決定論（宿命論）は Sūyagaḍaṅga-sutta にもみられる¹⁶⁾。

(V) にみられる「六の生まれ」（六生類）とは、生きとし生けるものはすべて、黒生類、青生類、赤生類、黄生類、白生類、極白生類の順に輪廻を繰り返しながら浄化し、最終的に解脱すると説くアーjeeヴィカ教の教義を指す。

3. 律に引用される「沙門果經」

次に、律（いずれも説一切有部所屬）に引用される「沙門果經」のマスカリン・ゴースーリプトラの所説を以下にあげる。

(11) SBV II, pp. 221²⁹-222⁹（説者：Maskarin Gośālīputra）:

(A) nāsti hetuḥ, nāsti pratyayaḥ; sattvā <saṃkliṣyante. (B) ahetvapratyayaṃ sattvāḥ saṃkliṣyante>; (C) nāsti hetuḥ, nāsti pratyayaḥ; sattvāḥ viśudhyante. (D) <ahetvapratyayaṃ sattvā viśudhyante>; (E) nāsti hetuḥ, nāsti pratyayaḥ, sattvānāṃ ajñānadarśane bhavataḥ. (F) ahetvapratyayaṃ sattvānāṃ ajñānadarśane bhavataḥ; (G) nāsti hetuḥ, nāsti pratyayaḥ; sattvānāṃ jñānadarśane bhavataḥ. (H) ahet-

vapratyayaṃ sattvānāṃ jñānadarśane bhavataḥ; (I) nāsti balam; (J) nāsti vīryam; (K) nāsti balavīryam; (M) nāsti puruṣakāraḥ; (N) nāsti parākramaḥ; (O) nāsti puruṣakāraparākramaḥ; (P) nāsty ātmakāraḥ; (Q) na parakāraḥ; (R) anātmakāraparakāraḥ; (S) sarve bhūtāḥ (T) asthāmā abalā avaśā avīryā aparākramāḥ (U) niyatasamṅgatibhāvaparīṇatāḥ (V) sukhaduḥkham pratisamvedayante, yaduta ṣaṭsu abhijātiṣu.¹⁷⁾

(A) 因はなく、縁はなく、諸の衆生は雑汚する。(B) 無因・無縁にして、諸の衆生は雑汚する。(C) 因はなく、縁はなく、諸の衆生は清浄となる。(D) 無因・無縁にして、諸の衆生は清浄となる。(E) 因はなく、縁はなく、諸の衆生には無知と無見がある。(F) 無因・無縁にして、諸の衆生には無知と無見がある。(G) 因はなく、縁はなく、諸の衆生には知と見がある。(H) 無因・無縁にして、諸の衆生の知と見がある。(I) 力はない。(J) 精進はない。(K) 力と精進はない。(M) 人による行為はない。(N) 努力はない。(O) 人による行為や努力はない。(P) 自らによる行為はない。(Q) 他者による行為はない。(R) 自らによる行為と他者による行為はない。(S) 一切の存在する者は、(T) 勢力なく、力なく、自在力なく、精進なく、努力なく、(U) 定めと機会と生来の性質によって変化し、(V) いわゆる六の生まれにおいてのみ、楽苦を感受（経験）する。

(12) 『出家事』 T. no. 1444, 1025a23-29（説者：末羯利瞿闍離子）:

(A) (B) 無因無縁有情受苦。(C) 無因無縁得淨。(D) 不由因縁自然得淨。(E) (F) 無因無縁有情無智慧無見 (G) (H) 無因無縁有情自然智慧有見。(I) 無力。(J) 無精進。(M) 無丈

夫 (N) 無世力。(P) 無我形。(Q) 無他形。
(R) 無我作。無他作。(S) 一切有情。一切有
命。一切有類。(T) 無處無居無觀。(U) 決定
正道有情歸依。(V) 苦樂覺悟。所謂六道衆
生。¹⁸⁾

(13) 『毘奈耶』 T. no. 1442, 692c26-693a4 (説者:
末塞羯利瞿舍利子):

(A) 一切有情無因無緣而有煩惱。(B) 一切有
情無因無緣爲煩惱所逼。(C) 一切有情無因無
緣而有清淨。(D) 一切有情無因無緣而得清淨。
(E) (F) 一切有情無因無緣而有無知。(G) (H)
一切有情無因無緣了無知事。(I) (J) 一切有情
無力無勤。(M) (N) (P) (Q) 無勇無進無自
無他。(S) 一切有情諸有命者 (T) 無有威勢。
(V) 於六生中常受苦樂。過此便無。¹⁹⁾

先にみたように、(E) (F) (G) (H) の文は
(1) SPS にはみられないが、(11)、(12)、(13)
に共通してみられる。

これら (E) (F) (G) (H) の文は、(6) (E)
(F) (G) (H) の文、あるいは (9) ⑤ (E)、⑦
(E) (G) の文と (部分的に) 対応する。

また、(11) には (K)、(O)、(R) の文がみら
れ、(13) には (U) に相当する文がみられない。

3. 論に引用される「沙門果經」

次に、論 (いずれも説一切有部所屬) に引用
される「沙門果經」のマスカルン・ゴーシャー
リプトラの所説を以下にあげる。

(14) 『阿毘曇八犍度論』 T. no. 1543, 913b4-15 (説
者: 不明):

… (A) 無因無緣衆生有垢。(B) 無因無緣衆
生有垢。… (C) 無因無緣衆生淨。(D) 無因無
緣衆生淨。… (E) 無因無緣衆生無智無見。(F)
無因無緣衆生無智無見。… (G) 無因無緣衆生

智見。(H) 無因無緣衆生智見。… (I) 無力
(J) 無精進。(K) 無力精進。(P) 無自作 (Q)
無他作 (M) 無土作。非自作非他作非土作。士
力士精進士方便。(S) 一切衆生一切蟲一切神。
(T) 無力無自在無精進無方便。(U) 有行報無
因無緣 (V) 衆生受苦樂。於六六生。

(15) 『發智論』 T. no. 1544, 1027c4-14:

(16) 『阿毘達磨大毘婆沙論』 T. 1545, 989c4-
990b21 (説者²⁰⁾: 無衣迦葉波計、末塞羯梨):

(A) 無因無緣。令有情雜染。(B) 非因非緣。
而有情雜染。… (C) 無因無緣。令有情清淨。
(D) 非因非緣。而有情清淨。… (E) 無因無
緣。令有情無智無見。(F) 非因非緣。而有情
無智無見。… (G) 無因無緣。令有情智見。(H)
非因非緣。而有情智見。… (I) 無力。(J) 無
精進。(K) 無力精進。(M) 無土。(N) 無威
勢。(O) 無土威勢。(P) 無自作。(Q) 無他作。
(R) 無自他作。(S) 一切有情。一切生。一切
種。(T) 無力。無自在。無精進。無威勢。(U)
定合性變。(V) 於六勝生。受諸苦樂。²¹⁾

(15)、(16) に引用される「沙門果經」は、(11)
のものとよく一致するが、説者については、マ
スカリン・ゴーシャーリプトラ (末塞羯梨) の
他、アチューラ・カーシャパ²²⁾ (無衣迦葉波計)
とされる。また、(15)、(16) には (K)、(O)、
(R) の文がみられる。

4. 註釈書に引用される「沙門果經」

Vinayavastuṭīkā (VVṬ) は『根本説一切有部毘
奈耶出家事』に対する Kalyānamitra による註釈
書であるが、ここに引用される「沙門果經」の
マスカルン・ゴーシャーリプトラの所説を以下
にあげる。

(17) VVṬ (P: no. 5615 (Dzu) 222a8-225a8; D:

no. 4113 (Tsu) 201b2-203b7):

(A) sems can rnam kun nas nyon mongs par
'gyur ba la rgyu med rkyen med do || (B) sems
can rnam rgyu med rkyen med par kun nas
nyon mongs par 'gyur ro ||¹ ... (C) sems can
rnam rnam par dag par 'gyur ba la rgyu med
rkyen med do || (D) sems can rnam rgyu med
rkyen med par rnam par² dag par 'gyur ro ||³
... (E) sems can rnam shes pa med par 'gyur ba
dang⁴ mthong ba med par 'gyur ba la rgyu med
rkyen med do || (F) sems can rnam rgyu med
rkyen med par shes pa med pa dang | mthong ba
med par 'gyur ro ||⁵ ... (G) sems can rnam shes
par 'gyur ba dang | mthong bar 'gyur ba la rgyu
med rkyen med do || (H) sems can rnam rgyu
med rkyen med par shes pa dang | mthong bar
'gyur ro ||⁶ ...

(I) stobs med do || (J) brtson 'grus med do ||
(K) stobs dang brtson 'grus med do || (M) skyes
bu'i rtsal med do || (N) pha rol gnon pa med do
|| (O) skyes bu'i rtsal dang pha rol gnon pa med
do || (P) bdag gi rtsal med do || (Q) gzhan gyi
rtsal med do || (R) bdag gi rtsal dang gzhan gyi
rtsal med do || (S) sems can thams cad dang | srog
chags thams cad dang || (T) 'byung po thams cad
mthu med do || stobs med do | dbang med ||⁷
brtson 'grus med | pha rol gnon pa med do ||
(U) 'gro ba mtshams sbyor ba'i srid pa dag nges
par gyur to || (V) 'di ltar 'gro ba drug po dag tu
bde ba dang | sdug bsngal so sor myong bar
'gyur ro ||⁸

1. D: ... ||. 2. P omits rnam par. 3. D: ... ||. 4. D:
dang |. 5. D: ... ||. 6. D: ... ||. 7. P omits |. 8. D: ... ||.

(17) VVTに引用される「沙門果經」は、説一切有部所属の文献の中でも、(11) SBV や (15) 『発智論』、(16) 『阿毘達磨大毘婆沙論』のもの

と一致する。また、(17) には (K)、(O)、(R) の文がみられる。

5. おわりに

説一切有部に伝承される「沙門果經」のマスカリン・ゴーシャープトラの所説としては、(11) SBV、(15) 『発智論』、(16) 『阿毘達磨大毘婆沙論』、(17) VVT に引用されるものがよく一致している。また、これら (11)、(15)、(16)、(17) に共通してみられる (E) (F) (G) (H) の文は、(6) (E) (F) (G) (H) の文、あるいは (9) ⑤ (E)、⑦ (E) (G) の文と (部分的に) 対応する。

また、(9) ②、(11)、(15)、(16)、(17) には (K)、(O)、(R) の文がみられる。

略号

AN = Aṅguttara-Nikāya, PTS

D = Derge/sDe dge edition

DN = Dīgha-Nikāya, PTS

Ja = Jātaka, PTS

MN = Majjhima-Nikāya, PTS

P = Peking edition

Pj = Paramatthajotikā, PTS

Ps = Papañcasūdanī, PTS

PTS = Pali Text Society

Pv = Petavatthu, PTS

SBV = Raniero Gnoli (ed.) 1977-78 *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, part I-II, Roma.

SN = Saṃyutta-Nikāya, PTS

Sn = Suttanipāta, PTS

Spk = Sāratthappakāsinī, PTS

SPS = Sāmaññaphalasutta

Sv = Sumaṅgalavilāsinī, PTS

T = 大正新脩大藏經

VVṬ = Vinayavastuṭīkā

諸橋 = 諸橋轍次『大漢和辭典 (修訂版)』大修館書店

参考文献

紙面の都合上、一部をあげるにとどめる。

Alsdorf 1975 “Pali Miscellanies,” *Studien zur Indologie und Iranistik*, Heft 1, pp. 109-117.

Basham 1951 *History of Doctrines of Ājīvikas*, London.

Bollée 1977 *Studien zum Sāyagaḍa I*, Wiesbaden.

Hoernle 1885-1890 *The Uvāsagadasāo, or the Religious Profession of an Uvāsaga Expounded in Ten Lectures II*, Calcutta.

Jacobi 1895 *Jaina Sūtra II*, Oxford.

Schubring 1926 *Worte Mahāvīras*, Göttingen.

C. Vogel 1970 *The Teachings of the Six Heretics According to the Pravrajyāvastu of the Tibetan Mūlasarvāstivāda Vinaya*, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, Band 39, Wiesbaden: Kommissionsverlag F. Steiner.

宇井伯寿 1965 『印度哲学研究 第二』岩波書店

ヴィンテルニッツ著・中野義照訳 1976 『ジャイナ教文献』日本印度学会

雲井昭善 1967 『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店

高木神元 1973 「沙門果經にみられる六師外道と経作者の意図」『仏教学会報』第4, 5号合併号: 1-12

高木神元 1981 「初期仏教研究備忘 (一) - アージーヴィカ教と道徳律 -」『仏教学会報』7: 3-10

高橋審也 1973 「アージーヴィカの業思想について (一)」『印度学仏教学研究』42, pp. 647-648

仲宗根充修 2006 「初期仏典に見られる常住論, 断滅論, 無因論, 及び縁起説の立場からの批判」『印度学仏教学研究』108, pp. (160)-(164)

中村元 1991 『思想の自由とジャイナ教』(中村元選集 [決定版] 第10巻) 春秋社

浪花宣明 1998 『サーラサンガハの研究』平楽寺書店

梵文仏典研究会 1994 「梵文『沙門果經』和訳 (1)」『佛教大学仏教学会紀要』2, 佛教大学仏教学会: 1-32

村上真完・及川真介 1988 『仏のことは註—パラマツタ・ジョーティカー—』3, 春秋社

渡辺研二 1984 「マンカリブッタの教説 (1) —Isibhāsīyāim 11 から—」『印度学佛教学研究』64: (39)-(42)

註

1) Cf. Ja VI, 544 Mahānārada-kassapajātaka, pp. 225-226; Pv, IV Mahāvagga 3 (38 Nandakapetavatthu),

pp. 80-81.

2) Sn, no. 901. Cf. T. no. 198, 183a10-11: 猗著是衆可惡可見聞亦所念 雨出淨誰爲明 愛未除身復身。

3) Alsdorf (1975: 109ff.), 高木 (1981).

4) 渡辺 (1984).

5) SN II 3 10 Nānātitthiyā (SN I, p. 66). Cf. T. no. 99, 359c2-5: 厭離於黑闇 心常自攝護 永離於世間 言語諍論法 從如來大師 稟受沙門法 善攝護世間 不令造衆惡; T. no. 100, 478a4-6: 苦行可譏毀 撿攝於己身 斷惡口忿諍 苦樂同世尊 於其法主所 不造作衆惡。

6) AN I. 18 Makkhalivagga (AN I, p. 33²²⁻²⁵).

7) AN 3. 14 Yodhājīvavagga 135 (AN I, p. 286³⁰⁻³³).

8) Cf. Sv I, pp. 143³⁰⁻¹⁴⁴; 浪花 (1998: 287). Cf. Sn, Sabhiyasutta, p. 92²; Pj II, p. 423³⁻⁶; 村上・及川 (1988: 180).

9) Cf. 宇井 (1965: 369-386), 雲井 (1967: 125ff.).

10) Cf. Sv I, pp. 160²⁴-161³¹; Ps III, pp. 119²³-121²³; Spk II, pp. 340²⁴-341¹⁷.

11) Cf. Spk III, p. 175¹¹⁻¹².

12) 諸橋によれば、「冤讐」は「あだ」「仇敵」の意。

13) 諸橋によれば、「數」は「運命」「さだめ」の意。

14) Cf. Basham (1951: 17, 80ff.); 高木 (1973: 5).

15) Hoernle (1885-1890: 110-111), Basham (1951: 217-218), 雲井 (1967: 77), 高橋 (1973: 647), 中村 (1991: 96), 拙論 (2006).

16) Jacobi (1895: xxv-xxvi, 239-240), Schubring (1926: 124), Basham (1951: 226-227), Bollée (1977: 82, 84), ヴィンテルニッツ (1976: 351).

17) Cf. P no. 1030 (Ce) 241a8-b4; D no. 1 (Nga) 262a5-b2. Cf. 『破僧事』T. no. 1450, 205c12-17: 於我經中作如是説。無因無果無善無惡。無有煩惱無有斷者。無有涅槃無有得者。三世之中所有因果皆悉空無。一切皆是自然。智者自然智。愚者自然愚。無有修者。亦無有得者。亦無自利。亦無利他。一切衆生無因生無因滅。

18) Cf. P no. 1030 (Khe) 24b2-8; D no. 1 (Ka) 24b2-7; Vogel (1970: 12-13):

sems can rnam kun nas nyon mongs par 'gyur ba la rgyu med rkyen med do || sems can rnam rgyu med rkyen med par kun nas nyon mongs par 'gyur ro || sems can rnam rnam par dag par 'gyur ba la rgyu med rkyen med do || sems can rnam rgyu med rkyen med par rnam par dag par 'gyur ro || sems can rnam shes pa med par 'gyur ba dang | mthong ba med par 'gyur ba la rgyu med rkyen med do || sems can rnam rgyu med rkyen

med par shes pa med pa dang | mthong ba med
 par 'gyur ro || sems can rnams shes par 'gyur ba
 dang | mthong bar 'gyur ba la rgyu med rkyen
 med do || sems can rnams rgyu med rkyen med
 par shes pa dang | mthong bar 'gyur ro || stobs med
 do || brtson 'grus med do || stobs dang brtson 'grus
 med do || skyes bu'i rtsal med do || pha rol gnon pa
 med do || skyes bu'i rtsal dang pha rol gnon pa
 med do || bdag gi rtsal med do || gzhan gyi rtsal
 med do || bdag gi rtsal dang gzhan gyi rtsal med
 do || sems can thams cad dang | srog thams cad
 dang | 'byung po thams cad mthu med || stobs med
 do || dbang med do || brtson 'grus med do || pha rol
 gnon pa med do || 'gro ba mtshams sbyor ba'i srid
 pa dag nges par gyur to || 'di ltar 'gro ba drug po
 dag tu bde ba dang sdug bsngal so sor myong bar
 'gyur ro |

- 19) Cf. P no. 1032 (Che) 236b2-8; D no. 3 (Ca) 257a6-b3.
- 20) Cf. T. no. 1545, 990b29-c1: 此は無衣迦葉波計如後當說。Cf. T. no. 1545, 1002b13-14: 無因無緣等是末塞羯梨見。
- 21) Cf. 『尊婆須蜜菩薩所集論』 T1549, 792a9-b8: 無因無緣。衆生垢著。非有因非有緣。衆生染著。…無因無緣衆生清淨。非有因非有緣衆生清淨。…無因無緣衆生無智無見。非有因非有緣衆生無智無見。…無因無緣。衆生智見。非有因非有緣。衆生智見…無力無精進。
- 22) Cf. 『雜阿含經』「阿支羅」 T. no. 99 (302) ; 『阿支羅迦葉自化作苦經』 T. no. 499. Cf. 赤沼智善 1967 『印度佛教固有名詞辭典』 (增訂版) 法藏館; G. P. Malalasekera, *Dictionary of Pāli Proper Names*, see "Acela-Kassapa."